

【一】 次の①～④の傍線部のカタカナを漢字に直し、⑤～⑧の傍線部の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

- ① 全力をア^アげて戦う。
- ② これまでの努力がケ^ケツジツした。
- ③ 権力者が国をト^トウチする。
- ④ イベントのホ^ホッキニンに名を連ねる。
- ⑤ その道の専門家の知^知己を得る。
- ⑥ 彼の行動に閉^閉口する。
- ⑦ 私の弟は意^意気地^地がない。
- ⑧ 優しい声^声が耳に快^快く響^響く。

【二】 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

味というものにも、実は世界があります。

食材や料理の味もそうですが、ここでのいうのは、記憶の中の味の世界です。

食¹べることは記憶をつくることだと、よく指摘されることがあります。たとえば、料理人にとって料理とは舌の記憶である、というように。

私たちは普段おいしいものを食べたときに、その「おいしかった」という記憶は、わずか数日間、残っている程度のものでしかありません。とくに料理をつくる機会の少ない男性は、料理の味をいちいち吟^{ぎん}味^みして記憶しておこうという意識が働かないため、なおさら記憶に深く残らないでしょう。「あの店の味」とか「あの人の手料理の味」というように、大づかみに把握^{はあく}できているものの、突然に目の前に同じ味の料理が出てきたときに、「たしかにあの店の味と同じだ」と認識することはほとんどできないのです。

A、味わうことを意識して行くと、味の記憶はずいぶん変わってきます。

たとえば、目の前にサクランボがあるとします。それをひとつ口に入れて、ゆっくりと何度も噛^かみながら、1分間くらい舌で転がします。

すぐに飲み込んではいけません。すると、単に果物の甘酸っぱさと感じていたサクランボの味も、思っていた以上に豊かな広がりがあることを理解できるようになります。そうやって、滋^じ養^{よう}に満ちた味のふくらみと輪郭^{りんかく}をくつきりと記憶することが、舌の記憶というものなのです。

このとき、心からおいしいと感じるものは、すでに述べたように身体が本当に欲している食べ物だといえるでしょう。お腹がすいているからおいしいという感覚と、身体が欲しているからおいしいという感覚は、はつきり異なっているのです。こうしてたくさんの味の記憶を持つと、食事の世界もより広がっていきます。

たくさんの味の記憶を持つことは、いわゆる舌が肥えるということです。舌が肥えていると

いうと、高級食材や高価な料理をすぐに思い浮かべるかもしれませんが、実際はそうではありません。本当は、サクランボひとつにしても、今年のそれがいい味わいなのか、どのくらい滋養に満ちているのか、味を聞き分ける能力のことを指しています。

生きていくのにそんな能力は必要ないと思うかもしれませんが、それは誤解です。自分の五感をよく使える人は、それだけで尊敬²に値します。

五感³は、コミュニケーション力や交渉力、あるいは判断力や実行力、さらには決断力など、あらゆる仕事の能力の土台を構成する感覚です。わざわざスクールに通って習うようなものではないにしても、五感を磨^{みが}くことはとても重要だと思っています。

食事をとるときに、それが楽しくできるのですから、せっかくのチャンスを使わない手はありません。味わうことを意識するようになれば、読者のみなさんの味の記憶の世界もぐんと豊かになり、それが人生をより面白いものに変えてくれるのではないかと思います。

このように考えていくと、人間にとって食事は、単に栄養補給であるばかりでなく、学びの機会であることがわかってきます。

たとえば、たいていの人は、相手が話すことを聞いて、その人がどの程度の人物かすぐに理解するでしょう。なぜかという、相手のバックグラウンドが、話し方や言葉の選び方について出てしまうからです。そのため、自分よりも能力が高い相手だとか、自分よりも知識がある相手だとか、相手とほんの少し会話をするだけでふつうはすぐにピンと来ます。

だからこそ、選挙で政治家を選ぶときに、口ではどんなにいい政策を表明しても、話しぶりが悪い候補者に私たちは投票しません。「胡散臭^{うさんくさい}いな」「信用できないな」と、すぐにわかってしまうからです。

食事にも似たようなところがあり、相手の食事の仕方を見ると、その人がどのくらいの人物なのか、おおよそ判定がつかめます。教養の程度はどのくらいか、人格的に高潔な人物か、相手のバックグラウンドが、何をどのように食べるかということに全部出てしまうからです。そして、信頼に足る人物か、そうでないのか、すぐに理解できるでしょう。

B、どう食べるかは、どう話すかと同様に、人格を露^{あらわ}にする行為です。

バルセロナオリンピックの女子マラソンで銀メダルを獲得した有森裕子さんのご両親は、あるインタビューに答えて、こんなことをいっていました。

「食生活は人格をつくると信じていましたから、食事は必ず一緒にとる。いいものを食べるのではなく、一緒に食⁴べることで、共に生きていくことを、知らず知らずのうちに子どもに教えることができると思いました」「プロフェッショナルに聞く！ 生きる力の育て方」スクスクのつぼくん

いうまでもないことですが、一緒に食事をとることで教えるというのは、食事の仕方にあれこれやかましく注文をつけることではありません。箸^{はし}を動かす、手を動かす、そして口を動かす。一緒に食事をとれば、あらゆる動作がお互いのコミュニケーションになり、それを通じて学びが起⁴こるということをいっているのでしょう。

仕事ができる人というのは、男性も女性も、何事においても学ぶことのできる人だと私は

思います。

たとえば、たくさんの本を読んでも情報を吸収するのみで、そこに流れている考え方を深く自分の中に吸収しようとしていない人がいます。そういう人は、たしかに情報通にはなれるでしょうが、高度な判断力や決断力を身につけることはできません。

多くの人は、情報をたくさん知っているだけで、人の優位に立つことができると考えているかもしれません。たしかに、21世紀に入ってから顕著な「由らしむべし、知らしむべからず」という政府の露骨な態度は、私たちに情報の独占こそが権力の源泉であるという錯覚をもたらします。その結果、情報さえ知っていれば、誰もがあらゆる競争で勝てると考えてしまっています。しかし、東日本大震災以降の出来事を眺めてみると、本当の瀬戸際に立たされたときに、情報をたくさん独占している人たちには重大な判断を間違えなく下す力がまったく備わっていなかった、ということがはつきりしてしまいました。そういう人たちと結託して大儲けをしたきたビジネスも、大損害をこうむりました。

そこに関わっている人々は一様に高学歴で、難しい試験にも受かっていることですが、いまにして思えば、そのキャリアにいったい何の価値があったのでしょうか。

食事についても、それを食べたという情報に価値はありません。

C、他人から高級レストランの高級な料理を食べたという話を聞くと、「いいなあ」と感じるかもしれません。そういうところに行く機会がない人にとっては、ベールの向こうの知られざる世界です。

しかし、本当はその事実にとりたてて意味はないのです。味わうことや食べることの本质とは関係がないからです。それは贅沢をするだけの余裕があるという話であり、高級レストランによく行く人も、本当に高級料理を堪能しているかといえば、している人はごく一握りでしょう。

大切なのは、事実をリアリティのある経験の記憶に変えることです。高級料理を食べたのに、たいていの人は、その経験が高級レストランに行ったという事実の記憶に変わってしまいます。本来経験というのは、何をどう食べ、それを自分の舌と身体がどう受け止めたかという、ひとまとまりのリアリティです。何をどのようにつまんで口に入れたのか、口の中に入れるとどんな感じがしたのか、噛みごたえはどのような感じで、のど越しはどうだったか。そして、身体はその味にどう反応したのか、ほったが落ちるような感じがしたか、それとも思わず笑みがこぼれるような感じだったのか、等々。

そこまでいちいち意識する必要はないかもしれませんが、おいしい食事は必ず鮮烈な記憶をあたえてくれます。たとえば、漁師さんがさつと海水をかけて渡してくれた、獲れたての牡蠣を口に入れたときのような、鮮烈な生の記憶です。人間は、リアリティのある経験の記憶を獲得すると、新しい行動をとるようになります。人間が成長するのは、行動によって鮮烈な記憶を獲得し、それが次の新たな行動を促すからです。

私は、そうした記憶を蓄えていくことが、食を通じた学びではないかと思っています。そして、それを追求していくことは、人格を磨くことにもつながっていくと思います。

食事から学ぶことは、思いのほかたくさんの事柄があるはずで、仕事ができる人は、そう

いうところからも絶えず学びつづけ、五感を研ぎ澄まし、自分の世界を広げていく人でしょう。何をどう食べるか。それはほんの一瞬の豊かな飽食の時代を生きる現代人にとっても、とても大切にすべきテーマなのです。

(笠井奈津子『甘いものは脳に悪い』による)

※1 バックグラウンド……性格や、その人が今いる地位などを作り出した環境。生い立ち。育ち。また、経歴。

※2 「由らしむべし、知らしむべからず」……人民に道理を理解させることより政策に従わせる方が大切だという言葉。

問一 文中の空欄Aに入る語として、最もふさわしいものを、次のア・カの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を用いてはいけません。

ア たえば イ さて ウ つまり
エ ところガ オ なぜなら カ また

問二 傍線部1「食べることは記憶をつくることだ」とありますが、食べることでたくさん記憶が作られるとどのようになりますか。本文中から五字で探し、抜き出して答えなさい。

問三 傍線部2「尊敬に値します」とありますが、これをことわざで言い換えたものとして最もふさわしいものを、次のア・オの中から選び、記号で答えなさい。
ア 寄らば大樹の陰 イ 足元を見る ウ 一目置く
エ 鬼に金棒 オ 快刀乱麻を断つ

問四 傍線部3「人間にとって食事は、単に栄養補給であるばかりでなく、学びの機会である」とありますが、そのように言えるのはなぜですか。最もふさわしいものを、次のア・オの中から選び、記号で答えなさい。

ア 誰かとコミュニケーションをとりながら食事をすることによって、様々な刺激が生まれ、自分の五感を磨くことができるから。
イ 味わうことを意識して食事をする、味の記憶の世界が広がるため、自分を新しい別の世界に連れて行くことができるから。
ウ 味の記憶を豊かにすることで、自分の五感をうまく使うことができ、さらに、コミュニケーション能力も高めることができるから。
エ あらゆる動作がコミュニケーションとなる食事の場では、積極的に誰かと会話をしようという意識が生まれるから。
オ 味の記憶を意識することで、様々な能力の土台となる感覚を磨くことができ、人生をより豊かにすることができるから。

問五 傍線部4「仕事ができる人」とありますが、筆者の考える「仕事ができる人」として最もふさわしいものを、次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 今までの古い価値観に縛られず、絶えず新しい価値観を求め続ける人。
イ 様々なものから絶えず学び続け、五感を研ぎ澄まし、自分の世界を広げている人。
ウ ほかの人よりもたくさんさんの情報を持ち、その情報をうまく活用し行動できる人。
エ 本をたくさん読み、その本に書かれている考え方を深く理解しようとする人。
オ 経験していないことも、リアリティのある経験の記憶に変換することができる人。

問六 傍線部5「それを食べたという情報に価値はありません」とありますが、それはなぜですか。最もふさわしいものを、次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 高級レストランの料理を食べたからといって、それはただ贅沢をするだけの余裕があるという自己満足にすぎないから。
イ ものを食べたという情報は、何をどう食べたかということを細かく思い出せなければ、全く意味のない情報であるから。
ウ 何かを食べたという情報は、それをどう受け止めたかという経験の記憶に変換することによって、初めて意味を持つものであるから。
エ 経験の記憶としていまままで蓄積されてきたものが何かを食べたという新しい情報に書き換えられることで、なくなってしまうから。
オ 単にものを食べたという情報は、何をどう食べて体がどう受け止めたかというリアリティのある経験の記憶には変換できないから。

問七 傍線部6「飽食の時代」とありますが、どういう時代ですか。最もふさわしいものを、次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

- ア 食事をする際にも、常に自分を磨くことを意識しなければならないという時代。
イ 人間が生きていく上で必要な栄養素を、食事以外でも摂取することができる時代。
ウ 必要以上の食べ物が世の中にあふれ、食べることの大切さを見失ってしまった時代。
エ 高級レストランが世界中にあふれるような、食に対する意識が高まっている時代。
オ 食べ物が増えている国と、足りない国との格差が大きく広がっている時代。

問八 本文の内容と合致するものは1、合致しないものは2と解答欄に答えなさい。ただし、すべて同じ数字を用いてはいけません。

- ア 普段料理をしない人は、料理の味を記憶しておこうという意識が働かないため、特に男性は、味の記憶を意識して食事をするべきである。
イ 味わうことを意識して食事することで、舌の記憶を明確に残すことができるため、食事の際はいつでも誰かと一緒に食べなければならぬ。
ウ 一緒に食事をするのはコミュニケーションの一つであり、それにより相手の人格や能力などがわかってしまうものである。
エ 食事を通して鮮烈な記憶を得ることによって、人間は新しい行動を起こすようになり、成長することができる。
オ 舌の記憶を意識して食事することは大切であるが、時には何も考えずに食事を楽しむことも必要である。

三 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

一時代前の心理主義では、「私探し」ということがよく言われていました。私には「本当の私」というものがあるはずだ。けれども私は「本当の私」からかけ離れた「偽りの私」を生き返らなければならない。だから「本当の私」を探して、自分自身を回復しよう、といったような心理主義です。

私は一九九二年に亡くなった、歌手の尾崎豊の生き方について書いたことがあります（『癒しの時代をひらく』法蔵館）。尾崎豊の出発点は、今は偽りの私を生きているという、現在の自己への疑問です。汚れのなき本当の自分というのがあるはずなのに、こんなに自分は汚れてしまっていて、その中でもがき苦しんでいる、でもみんな、「本当の私」はあるんだよ、「偽りの私」ではない本当の私を探しに行こうよ！という調子で、それがその頃の若者世代には非常に受けたのです。それはまさに「本当の私」探しの歌でした。「私探しブーム」とは「本当の私」を探す、というブームだったのです。

ところが今の若い人たちに聞くと、その頃の心理主義と今の心理主義は違うと言います。今の心理主義、心理学の使われ方というのは、周りの人たちとかにうまくやっていくかがテーマだということです。どういう場であれ、そこに自分が投げ込まれた時に、周りの人を傷つけたり周りの人に傷つけられたりしないで、自分にいちばんいい評価がもらえるように、いかにその場やグループに適合した行動を採ればいいのか、いかに摩擦がなく周りの人とやっていくかという、心理マネージメントの心理主義である、と言うのです。

そこでは「本当の私」とは何かなどということは問われなくなっています。そもそも、ただひとつの「本当の私」などがあるということを信じるというのは時代遅れだということです。この場ではこういう私、あの場ではこういう私、という複数の私をいかにその場に合わせて上手

に使い分けていくのが大切なのです。

どんな場に投げ込まれても、そこでいちばんいい立ち居振る舞いはどうなのか、口のきき方は何なのかということを考えていく。ということは、その場がどんなにゆがんでいようが、全体の構造がどんなにおかしいものであるうが、そのことは問われないことになります。その中で自分が摩擦を起こさずやっていく、ということが大切な心理主義なのです。自分を突き詰めていく心理学よりも、いかに摩擦なく過ごしていけるかという、コミュニケーション技術のよきな心理学だと言えます。

自分の根っこを掘っていくというよりも、いかにソーシャルネットワークの中で嫌われずに生きていくか、それが重要なのです。①

そこでは「空気を読む」ということが重要になっています。いかにその場の空気を読んでみんなから嫌われず、調和を保っていけるかということが重要なのです。なので、成立しているその「場」自体の矛盾であるとか、その場自体がかかえている深い問題とかには立ち入りません。②

周囲の人たちといかにうまくやるか、「本当の私」なんかを追求するのではなく、会社という「場」でうまくやっている私、仕事から帰ってプライベートな場で恋人に嫌われずにうまくやる違う私、というふうに、複数の私を使い分けていけばいい、という考え方です。③

もちろん尾崎豊のように「本当の私」にだけこだわり続けてしまえば、それはとても苦しいことになってしまいます。どこの場でも同じ「私」を押し出す人がいたら、それはそれでけっこううっとうしい人かもしれません。④

誰だっっていくつかの顔を使い分けているということはあります。しかし、実際はその場その場に合せてはいても、その中でも「本当の私」はどこにあるのか、「本当の私」が言いすぎならば、自分自身にいちばんフィットしている私、いちばん信じられる私はどこにあるのかを考えることはとても大切なことです。⑤

どの場でも周囲の人に合せていく私、そういう自分に私たちは「自己信頼」を持つことができるでしょうか？空気を読みながら、周囲の人に嫌われないことだけを考えている私の「自己信頼」の核はどこにあるのでしょうか。

いろいろな場で顔を使い分けていても、自分の中で自己信頼ができる、核になる私があるというのと、単に周りに合わせて流されるというのは、まったく違います。その核の部分がなくて、どこに行っても、そこでうまくやればそれでいいんだといった形になっている、そのことが大きな問題なのです。

例えばファーストフードの店でアルバイトとして朝から晩まで調理をしている若者がいるとします。そこは狭い調理場で、次々に注文が入ってくるので、それに応じて次から次へとハンバーガーを焼いたりフライドポテトを揚げたりするのが仕事です。狭い厨房の中には店長がいて主任がいて、自分の他にもたくさんの若者もいて店が回っているという場の中で要求されるのは、いかに空気を読みながら一日どうにかやりおおせていくかということであるのは間違いありません。

しかし、そうやって働きながらも、A 私は正当な給料をもらっているのかとか、「私」というものがどのような社会的な構造の中にあるのかとか、社会的に抑圧されているのではないとか、世界の中で私のこの職場というのはいったいどのような場所として位置しているのだろう、というような発想は常に持つべきものでしょう。

狭い調理場の中でも、その閉じた場を超えて、世界の構造や本質を大雑把ではあるが、つかもうとしていけば、人生も変わってきます。オレはこれじゃ終わらないぞとか、僕の自己表現とはいったい何だろうと考えながら生きていくとか、自分はどこに向かっているのだろうかとか考えていく。そのことから、未来も切りひらかれていくのです。

ところがその場においても「空気読め」ばかりを考え、日々そこで摩擦なく過ごすことばかり目指す、という発想の中からは、ひたすらそこに留まってうまく調停していく自分以上のものが見えてこないのです。世界の構図を見れば、昔の言い方をすれば、私の行っている労働は疎外された労働ではないのだろうかとか、搾取されているのではないだろうかといった見方が出てくることもあるかもしれませんが、「空気読め」という心理主義からはそんなことは出てくるはずありません。

一方では原資をうまく回して巨額の富を得て、六本木ヒルズに住んでいる奴がいる。もう一方のオレはなんで時給一〇〇〇円足らずで働かされ、将来の展望も見えないし、年金を払って言われたってどうやって払っていいかわからない、いつまでこんなことやってなきやいないんだ、正規雇用に入っていけないじゃん、というのは、B 絵に描いたような搾取構造だといえます。

となれば、そのひどい状況に対しては何らかの異議申し立てをしていかなければいけない。そうしないと、その構造はずっと続いていくことになり、私の人生のリスクはますます増大していくのです。

「かけがえのない私」がどうしてこんな状況に陥っているのか、ということの原因を突き止めるなければなりません。C、自分のせいではないのに不当な扱いを受けているということになったら、是正せよ、と怒って誰にでもわかるように意思表示をしなければならぬのです。

(上田紀行『かけがえのない人間』による)

問一 傍線部1「その頃の心理主義と今の心理主義は違う」とありますが、どういうことですか。最もふさわしいものを、次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア 偽りの自分ではなく、「本当の私」でいることの理由を模索する心理主義から、ソーシャルネットワークの中で言いたいことを言っても、嫌われずにいる方法を模索する心理主義へと変化したということ。

イ 周囲の状況次第で考え方や行動を変化させていく、偽りの自分を第一に考える心理主義から、どのような場面であつても、自分の考え方を変えずに「本当の私」を第一に考える心理主義へと変化したということ。

ウ 「本当の私」という存在に気付きながらも、空気を読んで行動に移さなかった心理主義から、偽りの自分を生きるのではなく「本当の私」を探し、自分自身を回復しようとする心理主義へと変化したということ。

エ 他者の前で見せる偽りの自分ではなく、「本当の私」とは何なのかを考える心理主義から、それぞれの場面に適した自分をどのようにすれば見せられるか模索する心理主義へと変化したということ。

オ 汚れなき「本当の私」を探すために、他者との摩擦を恐れないという心理主義から、周囲の人間とぶつかりあうことを避け、「偽りの自分」を見せようとする心理主義へと変化したということ。

問二 この文章からは、次の一文が抜けています。入るべき箇所を本文中の①～⑤の中から選び、番号で答えなさい。

スーパースターとかアーティストとか芸術家とか作家とか、強烈な個性を持っている人はそれをやり通せるかもしれません。

問三 傍線部2「どの場合でも周囲の人に合わせていく」とありますが、この状況を言い換えた四字熟語として、最もふさわしいものを、次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア 以心伝心 イ 我田引水 ウ 切磋琢磨 エ 付和雷同 オ 一衣帯水

問四 空欄A、Cに入る語として、最もふさわしいものを、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を用いてはいけません。

ア いったい イ あえて ウ もし エ そして オ まさに

問五

傍線部3「狭い調理場の中でも、その閉じた場を超えて、世界の構造や本質を大雑把ではあるが、つかもうとしていれば、人生も変わってきます」とありますが、それはなぜですか。最もふさわしいものを、次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア 周囲に流されず、自分がどのような社会的構造の中の、どういう位置にいるのかを考えることで、今後、自分のすすむべき方向性が見えてくると言えるから。

イ 正規雇用されたところで将来の展望も見えず、その場に留まることしか考えられなくなり、世界の構図の流れを止めてしまおうと言えらるから。

ウ 日々過ごしている空間を摩擦のないものにしていくことが、いくつかの顔を使い分ける訓練になり、それは生きていく上で大切なことだと言えらるから。

エ 周囲の様子を伺いながら、どの場にもフィットするように振る舞うことで、自己信頼ができる「本当の私」が見えてくると言えらるから。

オ どのような場所においても、過去から現在の世界の本質を理解することで、自分自身の置かれた現状に対する不満が消えらると言えらるから。

問六

二重傍線部I「調停」、II「是正」の本文中の意味として最もふさわしいものを、次のア～オの中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

I「調停」

ア 説明などを聞くこと イ いつまでも同じ状態でいること

ウ 飾らずにありのまま述べること エ 根気よく調べ続けること

オ 争いがやむようにすること

II「是正」

ア 物事を詳しく知ること イ 悪いところを正しく直すこと

ウ 正しいことを証明すること エ 物事の道理になつていくこと

オ 物事を準備し整えること

問七

傍線部4「人生のリスク」とありますが、どのようなものですか。最もふさわしいものを、次のア～オの中から選び、記号で答えなさい。

ア 疎外された労働ではないか、搾取されているのではないかといった見方に対して疑問を抱きすぎるあまり、空気を読むといった行動が出来なくなってしまう、誰もが好き勝手なことを続けるというもの。

イ 摩擦なく過ごすことばかりを目標に掲げ、その対価が正当かどうかまで考えが及ばないため、不当な扱いを受けていることを認識したとしても全く怒りがわいてこず、感情を失ってしまうというもの。

ウ 巨額の富を得る人がいる一方で、わずかな時給で働く人もいるという世界の構図に対し空気を読むことを優先するあまり、疑問を抱くことが出来ず、負の世界構造から逃れることができないというもの。

エ 周囲の人間に対して自分の考えをぶつけることに抵抗を感じるあまり、不当な扱いを受けたところで、何の不満もなく受け入れるようになってしまい、今後の人生が搾取構造となっていくことに気付かないというもの。

オ 社会的に抑圧されていることへの怒りが収まらず、世界の中での私という存在の位置づけが見えなくなってしまう、このようなひどい状況が改善されることなくいつまでも続いていってしまうというもの。

問八

本文の内容と合致するものは1、合致しないものは2と解答欄に答えなさい。ただし、すべて同じ数字を用いてはいけません。

ア 私たちは空気を読むことばかりを考え、日ごろから摩擦を起こさないように過ごしているため、自分なりの自己表現が上手く出来ずにいる。

イ 私たちが周囲の人に見せている姿は本来の自分ではなく、場や周囲の人に求められたために生まれた、いわゆる偽りの姿である。

ウ 私たちの多くは自信もなく、自分のかけがえのなさがどこにあるのか分かっていないため、自己に対する評価が低く、いつも不安な状態である。

エ さまざまな場面や人に合わせて、複数の自分を使い分けながら、その中でも核となる自己を模索し続けることが大切だ。

オ 私たちはかけがえのない存在であるが、経済が右肩上がりでなくなってしまうため、そのかけがえのなさが社会から失われつつある。

氏 名

受 験 番 号

得 点

⑤		①	
	知己		ア
⑥		②	
	閉口		ケツジツ
⑦		③	
	意気地		トウチ
⑧		④	
く	快		ホツキニン

問一
A
B
C

問二
問三

問八
ア
イ
ウ
エ
オ

問四
問五
問六
問七

三
問一
問二

問三
問四
A
B
C

問五
問六
I
II
問七

問八
ア
イ
ウ
エ
オ

--

--

--

--

--

--

--